



江戸時代の文化を彩った人々

福井県

葛屋重三郎も生きた

江戸時代とクリエイターたちの歩み



家光	1639 鎖国の完成(ポルトガル船の来航禁止) 1641 オランダ商館を出島に移す	
1640年		
1660年	1657 明暦の大火(振袖火事)	
家綱	1669 寛文の大火(福井城天守焼失)	
1680年	1687 生類憐みの令 1688 柳沢吉保が側用人になる	
綱吉	1700年	
1703 赤穂浪士の討ち入り(赤穂事件) 1709 新井白石による「正徳の治」		
家宣	1716 享保の改革	
家継	1721 目安箱の設置	
1720年		
吉宗	1732 享保の飢饉 1735 青木昆陽がサツマイモの栽培法を記した「蕃語考」を著す	
1740年		
家重	1755 宝暦の飢饉	
1760年		
家治	1772 明和の大火(吉原遊郭が焼失) 1774 杉田玄白が「解体新書」を出版 1776 平賀源内がエレキテルを復元	
1780年		
1787 寛政の改革		
1800年		
家斉	1820年	
1831 葛飾北斎「富嶽三十六景」 1833 歌川広重「東海道五十三次」 1838 松平春嶽、越前福井藩主となる 1841 天保の改革		
1840年		
家慶	1850年	
1853 ペリー来航		

受け継がれる越前和紙 ～浮世絵がつないだ江戸のこころ～

【浮世絵は庶民の情報メディア】

現代では芸術作品という印象が強いかもかもしれませんが、この時代の浮世絵はいわば「情報メディア」として、庶民の雑誌としての役割を果たしていました。

江戸時代後期には巡礼や観光を目的とした旅行が庶民の間で大流行。各地の観光名所や風景を描いた名所絵は、旅気分を味わえるメディアとして人気を博しました。軽くてかさばらない浮世絵は江戸土産としても好まれ、さらに地方の人々の目にも触れるようになりました。

【当時の越前和紙の役割】

越前では早くから紙の生産が行われ、越前の五箇地区は奉書紙(公文書用紙)などの産地として知られていました。江戸時代には「越前の奉書は日本第一」と高く評価され、公文書として重宝されました。



葛飾北斎「諸国名橋奇覧 ちちぜんふくみの橋」
天保4～5(1833～34)年 福井県立美術館蔵

また、当時発刊された葛飾北斎の「諸国名橋奇覧」には全国の伝説的な橋の中から半石半木で知られた九十九橋が登場します。川岸には紙を干し板で乾かしている様子が描かれており、越前和紙が福井を象徴する名産品であったことが分かります。

【越前和紙の新たな活用～新版画～】

明治から昭和期に浮世絵の近代化と再興を目的に制作された新版画。江戸時代の浮世絵に比べ摺りの回数を増やしたことによる緻密さや臨場感が特長で、その芸術性によって海外からも高い評価を集めました。このほとんどの新版画に使われているのが越前和紙です。そこには日本の原風景や日本らしさを感じさせる花鳥が描かれ、福井の風景が描かれた作品も。越前和紙は発色の良さとその丈夫さが認められ、様々な需要に応じた作家たちの創作を支えました。



川瀬巴水「旅みやげ第一集 若狭久出の濱」
大正9年(1920) 渡邊木版美術館蔵



日本のメディア産業、ポップカルチャーの礎を築き
時にお上に目を付けられても面白さを追求し続けた人物
“葛重”こと葛屋重三郎の波乱万丈の生涯。
笑い、涙、謎に満ちた“痛快”エンターテインメントドラマ！

【総合】日曜 午後8:00／(再放送)翌週土曜 午後1:05
※放送から1週間見逃し配信
【BS】日曜 午後6:00
【BSP4K】日曜 午後0:15／(再放送)日曜 午後6:00

【主演】横浜流星(葛屋重三郎役)
【作】森下佳子

幕末の江戸で大活躍！ ふくいゆかりの版元「辻文」



「版元」とは今でいう出版社のこと。版元は、世間が何を求めるのか動向を探り、何が売れるのかを見極め、誰に依頼するかなども決めるプロデューサーでもあり、木版画がメディアの主流であった江戸時代に出版を担いました。

版元の代表的な人物と言えば、大河ドラマ「べらぼう～葛屋重三郎の波乱～」主人公の葛重こと葛屋重三郎を連想する人が多いと思いますが、江戸で躍動したのは葛重一人ではありません。激動の幕末に入ること、ふくいゆかりの人物が頭角を現します。それが、越前和紙の産地である五箇地区出身の「辻文」こと辻岡文助です。江戸に出た辻文は、幕末から明治にかけて大活躍し、後発ながら当時を代表する版元になったと伝えられています。

辻文が上京の際に成功を願掛けしたという地蔵が、現在の越前市岩本町に残っています。それが「出世地蔵」と呼ばれていることから、辻文の江戸での成功ぶりがうかがえます。

梅堂国政 「東京開花名景競永代はし」

【発行】福井県交流文化部誘客推進課 福井県福井市大手3丁目17-1 ☎ 0776-20-0762 FAX 0776-20-0513

【協力】福井県立美術館、福井県立歴史博物館、福井県立若狭歴史博物館、福井市美術館、坂井市龍翔博物館、鯖江市まなべの館、越前市、小浜市 (令和7年 4月発行)

江戸時代に躍動！

庶民から圧倒的な人気！

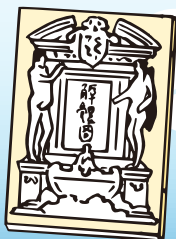
ふくいのすつごい” クリエイターたち

井原西鶴、松尾芭蕉とともに「元禄三大文豪」として名高い近松門左衛門。マルチな才能に恵まれ、特に俳人として活躍した豊田屋哥川。江戸時代から幕末・明治前期にかけて大流行した絵馬の工房「夢楽洞」を興した夢楽洞万司。こうした福井ゆかりのクリエイターたちが江戸時代に躍動し、文化を彩りました。



蘭学ブーム爆誕！
日本近代化の扉を開いた
ふくいゆかりの偉人

「解体新書」を著した杉田玄白や中川淳庵。ふくいゆかりの2人の偉人は、お互いに切磋琢磨しながら、新しい学問を切り開いていきました。



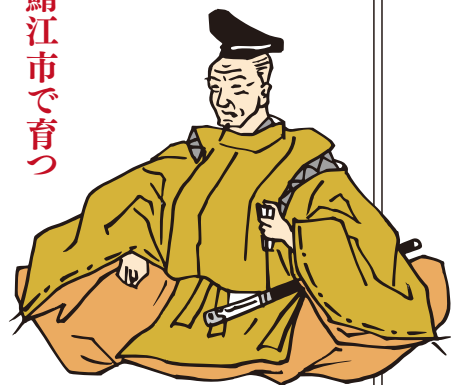
「解体新書」の著者。
平賀源内との友情を伝えるエピソードも

杉田玄白 1733(享保18年) - 1817(文化14年)

日本のシェイクスピア

近松門左衛門

ちかまつ もんざえもん
1653(承応2年)〜1724(享保9年)
福井藩士の子に生まれ、現在の鯖江市で育つ



近松門左衛門は、井原西鶴、松尾芭蕉とともに「元禄三大文豪」として名高い浄瑠璃・歌舞伎作者。福井藩士杉森信義の次男として誕生し、現在の鯖江市(吉江町)で育ちました。後に京都に移り公家に仕える中で、和歌や文学などの伝統的な文化や文芸に触れていたといわれています。武門に生まれながら、

【近松門左衛門と竹本義太夫】
近松は竹本義太夫とともに、豪快で劇的な語りが特徴の「義太夫節」を確立し、後に三人遣いの人形操法で人気を博しました。

【作風は感動的な人間ドラマ】
近松の作品は、社会的制約の中で生きる登場人物たちの人間的な葛藤や心情を細やかに描いた世話物が有名。人間の心のやさしさや愛情、憎しみや悲しみなどが感動的に描かれています。

SPOT 近松をもっと知る

1 鯖江市まなべの館
近松が育った鯖江市にある、芸術・歴史・文化が学べる総合博物館。2階には「近松の部屋」があり、1階の展示ホールでは、企画展に加えてさまざまなイベントを実施しています。

■鯖江市長泉寺町1-9-20
TEL.0778-53-2257



多芸に秀でた遊女であり俳人

豊田屋 哥川

とよだや かせん
1716(享保元 年)〜1776(安永5 年) 年？
江戸時代の滝谷出村で活躍



豊田屋哥川は、江戸時代中期の滝谷出村(現在の坂井市三国町)で活躍した遊女であり、俳人です。大和国初瀬川(奈良県桜井市泊瀬川周辺)の生まれとされ、遊郭の養女に入り、芸事や教養を身につけて成長。永正寺(三国町神明)住職から俳諧と書を学び、その才能を見いだされました。俳諧や書、茶、

【近松門左衛門も認めた三国湊】
三国湊の遊女は江戸の吉原と並ぶほど格式が高く、近松門左衛門が書いた歌舞伎狂言「傾城仏の原」の舞台にもなっています。

【加賀千代女との交流】
「哥川」は28歳の時に金沢行き、「朝顔やつるべとられてもらい水」の句が有名な俳人・加賀千代女らと句会を開いて親交を結びました。その後も交流は続き、59歳の時には、与謝蕪村が「玉藻集」を出す際に、千代女の執筆に協力して序文を寄せています。

SPOT ゆかりの地を訪ねる

2 港町三国
江戸から明治にかけて北前船交易で隆盛を極めた港町。当時は、豪商や船主、文人墨客が足を運ぶ料亭が立ち並んでいました。今でも三国湊周辺には豪商の邸宅など歴史的建造物が残り、情緒あるレトロな町並みを眺めながら散策が楽しめます。



150年続いた絵馬工房の創始者

夢楽洞 万司

むらくどう まんし
1735(享保20 年) 年？
人々を魅了した越前の「べらぼう」



初代夢楽洞万司は、江戸時代中期に活躍した絵馬師です。福井城下で生まれ、本名は万屋(大岡)曾平といひます。「万司仙人」の号を名乗り、当時流行した遊戯的な俳諧である雑俳の選者として頭角を現しました。選者がお題目を出して付句を募集する雑俳句合を、越前各地で興行しています。後に絵馬師と

なり、町絵師工房「夢楽洞」を開きました。工房は福井城下の小田原町(福井市田原町)にあり、世代交代をしながら「万司」の名を代々受け継ぎ、大正期まで約150年も絵馬の製作を続けました。絵馬のほかに天神絵も売出し、福井の庶民の暮らしを華やかに彩りました。

【万司の絵馬は旅の土産としても大人気】
万司が描いた絵馬は洒落っ気があって面白いものでした。旅の土産としても大人気で、越前国(福井県)だけでなく、加賀国(石川県)や越中国(富山県)など北陸一帯に広まりました。

【辞世の句から感じる初代万司の思い】
三国町の称名寺には、初代万司の辞世の句碑があります。その「自分たちは大した存在ではないけれども、一日だけの花の朝顔が咲き乱れるように、束の間でも大いに楽しもう」という歌意からは、工房を「夢楽洞」と名付けた万司の思いが感じられます。

SPOT 江戸時代にワープ

3 福井県立歴史博物館
県立歴史博物館が、県内に残る約4000枚の絵馬を調査したことをきっかけに、夢楽洞万司の存在が明らかになりました。館内には「夢楽洞」の絵馬が常設展示されています。
■福井市大宮2-19-15
TEL.0776-22-4675



絵馬工房再現ジオラマ

江戸時代、
小浜藩が輩出した
学問の偉人たちの
功績を学べる

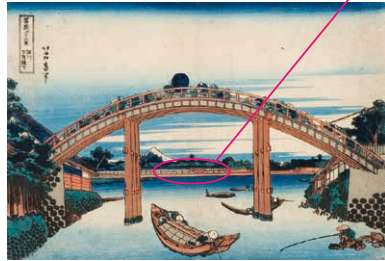
4 福井県立 若狭歴史博物館

美しい仏像、まつりなど、若狭ならではの歴史や民俗文化をわかりやすく紹介しています。2014年に一新された常設展示は見応え十分で、「若狭への海の道」というコーナーでは、「ターヘル・アナトミア」や「解体新書」などの資料を多数展示。江戸時代に学問推奨による人材育成に努め、若狭の発展に貢献した小浜藩の功績を知ることができます。
■小浜市速敷2-104 TEL.0770-56-0525



杉田玄白は江戸の小浜藩邸から、日本橋にあった診療所や翻訳作業を行った築地の中津藩邸に通いました。また、後に小浜藩邸近くの旗本屋敷を借り受けて私塾「天真楼」を開講し、多くの門弟を育てました。玄白の拠点であった小浜藩邸は、日本を代表する浮世絵師・葛飾北斎の「富嶽三十六景」にさげなく描かれています。当時、小浜藩邸は隅田川に架かる新大橋のすぐ西側にありました。この辺りは墨田川の分岐点であったことから通称「ミツマタ」と呼ばれた人気の景勝地で、北斎の画題に選ばれました。

葛飾北斎
「富嶽三十六景」に描かれた
玄白の拠点・小浜藩邸



葛飾北斎《富嶽三十六景 深川万年橋下》東京富士美術館蔵「東京富士美術館収蔵品データベース」収録

中川淳庵は、小浜藩の藩医であった父が、藩主の参勤交代に同行して江戸に住んでいたため、江戸の麹町で生まれました。杉田玄白とは同じ小浜藩の子同士で、玄白が江戸に住むようになったことで次第に親交を温めていきます。小浜藩医・蘭学者として玄白の良きパートナーとなり、「解体新書」完成に大きく貢献しました。
淳庵は、本草学(動植物・鉱物)の研究にも取り組み、19歳の時、本草学者・田村藍水の門弟になります。そこで同じ門下生の平賀源内と出会いました。多様な才能を発揮した源内の発明の一つに石綿が原料の燃えない布「火流布」がありますが、これは淳庵と共につくったものです。

中川 淳庵 1739(元文4 年) - 1786(天明6 年)

玄白の心強いパートナー。
平賀源内の発明にも貢献

杉田玄白は、代々医者の家系に生まれ、父は江戸の小浜藩邸で藩医を務めていました。父が小浜藩詰を命じられたことから小浜に移り、約5年間を過ごします。その後、父と江戸に出た玄白は、外科の医術を学んで医者になりました。玄白は、前野良沢、中川淳庵らと小塚原の刑場で死刑となった遺体の解剖に立ち合い、オランダ語訳の解剖学書「ターヘル・アナトミア」の正確さに衝撃を受けます。そして、当時大変な困難を伴ったオランダ語の翻訳に挑み、1774(安永3 年)ついに「解体新書」が完成。日本の医学が大きく前進するきっかけとなりました。蘭学ブームのなかで、オランダ語の翻訳技術が進み、医学以外の学問も盛んになりました。
また、「解体新書」の解剖図を描いた画家・小田野直武を紹介したのがエスキルの発明で知られる平賀源内です。後に源内が獄死した際、玄白らの手で台東区の総泉寺に埋葬されました。墓の横に建つ碑文には、源内の非凡な才能を称え、その非業の死を悼む玄白の言葉が刻まれています。

杉田玄白 1733(享保18年) - 1817(文化14年)